

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20730522  
 研究課題名 (和文) 教師の力量形成過程の解明を視野に入れたデューイ実験学校の学校経営に関する研究  
 研究課題名 (英文) A Study on the School Management of the Dewey's Laboratory School: Bringing the Clarification of the Process of Building Teachers' Capacity into View  
 研究代表者  
 森 久佳 (MORI HISAYOSHI)  
 愛知江南短期大学・現代幼児学科・准教授  
 研究者番号：00413287

## 研究成果の概要 (和文)：

本研究は、米国の哲学者・教育学者であるデューイ (J. Dewey) が設立・運営に携わったシカゴ大学附属実験小学校 (1896～1904年) (通称「デューイ実験学校」) の学校経営と教師の力量形成過程に焦点を当てた研究である。その主たる成果は以下の通り。

(1) 実験学校は前期 (1896～98年) において支柱となるカリキュラムを構成し、後期 (1898～1904年) においてはそれを基礎としながら、子どもの状況に対応した柔軟な形でカリキュラムをデザインしてきた。

(2) そうした過程で、ヤング (E. F. Young) との関わりを通して、実験学校では共同を通じた自由を基底とする専門職としての教師像と、知性と共に「共感」を備えた「共感的教師」の存在が重要視されていた可能性がある。

## 研究成果の概要 (英文)：

The purpose of this study is to make clear the process of school management and building teachers' capacity at the Dewey's Laboratory School in which J. Dewey had involved. The major findings are as follows;

- (1) The curriculum which had been constructed as the basis during 1896-98 was designed flexibly according to the children's situation at the Dewey's Laboratory School during 1898-1904.
- (2) In this process, through Mrs. E. F. Young's involvement, the emphasis had been on the image of teacher as professional with freedom and collaboration, and of "sympathetic teacher" with intelligence and "sympathy" at the Dewey School.

## 交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| 2009年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 2,100,000 | 630,000 | 2,730,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育学, デューイ実験学校, 教師の力量, 学校経営

## 1. 研究開始当初の背景

デューイ実験学校に関する研究動向は、近年、同校に関する新たな一次資料を用いた手法により転換点を迎えていた。

しかし、従来の先行諸研究では、実験学校の教師間の協同関係（同僚性）と、その教師たちと関係者（保護者やシカゴ大学の教員、院生など）との連携の実態が、学校経営という広範な観点からとらえられず、その結果、それを通して達成された教師の力量の内実とその形成の具体的過程が解明されてこなかった。こうした問題は、実験学校の運営に参画していたヤング（E. F. Young, 1845-1918）を分析の射程に含めていないことに起因すると考えられた。

そのため、ヤングの諸活動や諸著作と、これまで以上に多様な実験学校に関する一次・二次資料とを付き合わせる形で、同校の学校経営とそれを通して達成された教師の力量形成の実相に迫ることが何よりも必要であると研究代表者は確信するに至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、当時の米国の時代的・歴史的背景を踏まえながら、(1)デューイやヤング、実験学校の教師、関係者（大学院生、保護者など）の諸活動に着目し、教師間及び教師と関係者たちの間に築かれた協同と連携の関係の実相と、その中で発揮されたリーダーシップの内実といった、デューイ実験学校の学校経営の具体的スタイルを解明し、(2)そうした協同的・組織的な運営を通して達成された、専門職としての教師の力量に関する具体的内容と、その形成過程の実際をとらえることだった。

## 3. 研究の方法

デューイ実験学校と直接的及び間接的に関わる諸文献（実験学校やデューイ、ヤング、米国初等教育に関する教育内容・方法関連図書など）や当時の授業実践記録を中心とする一次・二次資料を詳細に吟味することが中心的な作業だった。

ここでいう実践記録とは、実験学校の教師たちが毎週の会合で報告した実践を記録したものであり、『実験学校活動報告』

(*Laboratory School Work Report*) と呼ばれる。本資料はシカゴ大学レイゲンシュタイン図書館に保管されており、この図書館に研究代表者が直接訪問することで入手した。

## 4. 研究成果

まず、2008年度の中心的な活動は、(1)デュー

イ実験学校と直接的及び間接的に関わる文献の収集や、デューイ実験学校の授業実践記録（『実験学校活動報告』）を中心とした一次資料を収集すること、(2)これらの収集した資料を分析・調査し、その成果を学会等で発表すること、であった。具体的な作業は以下の通りである。

(1):国内で入手可能なデューイ実験学校及びデューイやヤングに関する史資料や文献、また当時の時代的・歴史的背景を知るために米国初等教育に関する教育内容・方法及び学校経営と教師分野の関連図書を収集した。次に、『実験学校活動報告』を含んだ一次資料の選定作業を行い、シカゴ大学・レイゲンシュタイン図書館の特別コレクションを訪問し、1899年度（1899年10月～1900年6月）と1900年度（1900年10月～1901年6月）の『実験学校活動報告』の内容を入手した。

(2):デューイ実験学校の学校経営のスタイルを、カリキュラム・デザインに焦点を当ててその一端を分析し明らかにした（『愛知江南短期大学紀要』）。また、これと関連して、デューイ自身の教育思想における「教える（teaching）」・「教授（instruction）」の営みの本質的側面を吟味した（『地域協働研究所年報：地域協働』）。

これらの作業の結果、①前期（1896-98年）において、デューイ実験学校は支柱となるカリキュラムをデザインし、後期（1898-1904年）においてはそれを基礎としながら、子どもの状況に対応した柔軟な形でカリキュラムをデザインしてきたこと、②「指導・方向付け（direction）」が共同体的な活動に参加し生活することで効果的に為されること、そして、「学ぶ」-「教える」関係を「無意識的」なレベルでとらえるならば、すべての教育は「教え」を媒介として営まれるとデューイ自身が考えていたこと、を明らかにすることができた。

なお、上記の活動と関連した活動としては、カリキュラム・リーダーシップのモデル開発に関する内容を日本カリキュラム学会にて報告（口頭発表）したことなどが挙げられる。ここでは、我が国のカリキュラム・リーダーシップ実践の特徴と課題を検討し、①実践的リーダーが果たす役割は大きい、その資格や力量形成の機会が整備されていると言いつても言い難いこと、②診断的評価、カルテ、ポートフォリオなどを用いて、教師たちが子どもの意志をくみ取り、カリキュラムの開発と運用に生かしていること、③カリキュラムに関する理論やモデルを教師たちが実践を通して獲得していること、を明らかにした。

次に、2009年度の中心活動は、(1)2008年度に引き続き、実験学校に直接的及び間接的に関連する文献や史資料を収集すること、(2)それらの史資料を用いながら、平成20年度より行ってきた研究活動を総括的に整理・検討し、その得た成果を学会発表や論文で発表すること、だった。具体的な作業は以下の通りである。

(1)：デューイ及びデューイ実験学校だけでなく、デューイ及び実験学校と密接に関わったヤングに関する文献や資料、さらには、教師論、学校経営に関する著作・論文を収集した。また、今日的な課題も視野に入れるために、教育学やその諸領域（哲学や社会学など）に関する文献も入手し、重層的・横断的アプローチの導入も図った。

(2)：ヤングの教師論を分析し、デューイ実験学校における教師の力量観と学校運営との接点を探った。その成果を関西教育学会にて報告（口頭発表）し、論文としてまとめた（『関西教育学会年報』2010年6月公刊予定）。

これらの作業の結果、ヤングは教員及び教員を監督する立場の経験を通して、共同を通じた自由を基底とする専門職としての教師像を唱え、実践の場面では、知性と共に「共感」を備えた「共感的教師」の存在の重要性を説いていたことを明らかにすることができた。

なお、上記と関連する形で、以下の3つの活動があげられる。それは、①今日におけるカリキュラム・リーダーシップに関する研究成果を国内外の学会（日本カリキュラム学会、IAACS）で発表したこと、②教師に求められる資質・力量観に着目しながら、生活科の意義と課題を幼・保・小連携の観点から整理したこと（『地域協働』）、③実習に関するハンドブックの作成をまとめた実践報告の作成（『愛知江南短期大学紀要』）、である。

まず、①に関しては、わが国のカリキュラム・リーダーシップの特色を検討し、(i)今日的なカリキュラム実践は、カリキュラムに関する教師や関係者による問題解決過程としての性格が色濃い、(ii)問題解決に必要とされる知恵(wisdom)は、リーダーシップによって創出される、(iii)カリキュラム・リーダーシップは、創造的・民主的・管理的側面を統合し、それによって教師たちの「語り」と「探究」がいつそう充実する方向に機能すべきである、ということを示した。

また②に関しては、生活科は幼・保・小連携を図る上で今日においてその重要性と可能性を増していること、その一方で、子どもに対する教師の関わり方については、幼・保・小で共通する原理として「共感」や「ケア」が指摘されているにも関わらず、その原理的検討が不十分であることが課題となっ

ていることを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 小林邦江, 大河内修, 藤原辰志, 小原倫子, 森久佳, 斎藤修啓「実習事前事後指導に関する一考察：実習ハンドブック作成の過程から」『愛知江南短期大学紀要』39, 2010年, 173-180頁(査読無)。
- ② 森久佳「幼・保・小連携の観点からみた生活科の意義と課題に関する理論的検討：共通する教師の資質・能力観に着目して」『地域共同研究所年報・地域協働』6, 2010年, 印刷中(査読有)。
- ③ 森久佳「E・F・ヤングの教師の資質・能力観について」『関西教育学会年報』34, 2010年, 印刷中(査読無)。
- ④ 森久佳「デューイ実験学校(Dewey's Laboratory School)におけるカリキュラム・デザインの形態に関する一考察：『カリキュラムの計画(planning of a curriculum)』の特色に着目して」『愛知江南短期大学紀要』38, 2009年, 43-59頁(査読有)。
- ⑤ 森久佳「デューイの教育思想における『教える(teaching)』・『教授(instruction)』の営みの本質的側面に関する一考察：共同体における『指導・方向付け(direction)』の分析を基にして」『地域協働研究所年報・地域協働』5, 2009年, 1-23頁(査読有)。

〔学会発表〕（計4件）

- ① 矢野裕俊, 木原俊行, 森久佳「我が国におけるカリキュラム・リーダーシップ実践の展開：実践的リーダーシップの役割に着目して」日本カリキュラム学会第20回大会, 2009年7月12日, 神田外国語大学。
- ② 矢野裕俊, 木原俊行, 森久佳“Development of a Viable Model for Curriculum Leadership” 3rd Triennial Conference of the International Association for the Advancement of Curriculum Studies (IAACS), 2009年9月9日, NH The Lord Charles Hotel, Cape Town, South Africa.
- ③ 森久佳「E・F・ヤングにおける教師の資質・力量観について」関西教育学会第61回大会, 2009年11月15日, 大阪樟蔭女子大学。
- ④ 矢野裕俊, 木原俊行, 森久佳「カリキュラム・リーダーシップのモデル開発」日本カリキュラム学会, 2008年7月5日,

鳴門教育大学.

〔図書〕(計1件)

- ① 三宅茂夫編著、小川圭子、熊丸真太郎、佐藤和順、角野幸代、高岡昌子、豊田和子、浜野兼一、日坂歩都恵、福田規秀、宮地勢津子、森久佳、吉見正弘『新・保育原理:すばらしき保育の世界へ』(「第5章 保育所保育の内容を学ぶ」担当), 株みらい, 2009年, 77-93頁.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森久佳 (MORI HISAYOSHI)

愛知江南短期大学・現代幼児学科・准教授

研究者番号: 00413287

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし